# ある詩人の生涯

昭和31年10月30日　第1版刊行

著者　火野葦平（ひのあしへい）

刊行者　竹内富子

株式会社　三笠書房

東京都千代田區神田神保町二丁目
電話九段(33) 6504 7483　振替東京 22096

定価　350円
地方価　360円

© by Asihei Hino, 1956. Printed in Japan

堀内印刷・徳住製本

# ある詩人の生涯

昭和31年10月30日　第1版刊行

著者　火野葦平（ひのあしへい）

刊行者　竹内富子

株式會社　三笠書房

東京都千代田區神田神保町二丁目
電話九段(33) 6504 7483　振替東京 22096

定価　350円
地方価　360円

© by Asihei Hino, 1956. Printed in Japan

堀内印刷・德住製本

火野葦平

# ある詩人の生涯

三笠書房

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

# 目次

ある詩人の生涯……五
水……九五
對馬守の憂鬱……一四七
神の島……二二三
あとがき……二七三

# ある詩人の生涯

## 1

## 家　系

まづ
佛様に上げてからと

父は訓へ給ひ
母は忘れずに行ひ給うた

父を喪ひ
母に亡くなられて

いつか私も
佛様に上げてからと云つてゐる

お燈明を上げ鉦を鳴らし
眼を瞑つて拜む

なじみになつた青い線香が
俳句のやうに匂つてくる

大正四年一月十三日、淵上喬は、熊本縣水俣市陣内二九四〇番地で、淵上清の二男として生れた。父は士族で大地主、母タネは八代の松井家の侍醫松尾純齋の二女、どちらも名家の出であり、淵上家は水俣では名門であつた。舊家にはすべて屋號があり、淵上家は「新屋」と呼ばれてゐた。喬は小學校に通ふころから、すでに「新屋の腕白坊ちやん」の名をかち得た。

水俣に市制が布かれたのは太平洋戰爭後である。それも日本窒素の水俣工場があるためで、つそりとした古風な田舍町だ。封建の氣風も豐かである。由緒ある名門と名家とが幅を利かし、祭のときの神社の序列、席次、株、なども牢固とした風習にもとづいて定められてゐた。神社の席次などは高く賣買されるほどの價値があつた。喬は一生名門の亡靈とたたかひ通したが、彼が死の床に就いてから、この輕蔑してゐた封建の殘滓がどれだけ彼の命を長



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

びかせるに役立つたか知れなかつた。水俣は熊本縣の最南端、背後の矢筈嶽を越えればすぐに鹿兒島縣である。町の中を水俣川が流れ、裏手の山に登れば湯出、前面をひと山越えて海岸に出れば湯兒といふ二つの溫泉がある。町は八代灣に面し、水平線は天草の島々にさへぎられてゐるが、この地點からでも不知火を見ることができる。かういふ靜かで古典的な町では、喬少年の行動は事々に目立つた。

寒い日の晝下り、芝居の町廻りがやつて來る。樂隊が鳴りわたり、幟の列がつづき、すこし先をかけ廻る半纏姿の男は糊をつけた廣告紙をべたべたと家々の壁に貼つて行く。町の人たちが顏を出す。町の人たちは見つける。ドンガ、ドンガ、ドンガラガッタンとジンタの音に歩調を合はせて、十本ほどの幟をかついで行くのはみんな子供だが、その先頭に喬がゐるのである。喬を取りあげたおヤモ婆さんがそれを見つけた。おヤモはあわてて「新屋」に駈けこんだ。

「奥さん、お宅の坊ちやんが樂隊の旗ば、一番まつさき、かためつ行きよんなはるますばい」

正月大根を下させてゐた母タネはおどろいて、すぐに下男の留次を迎へに走らせた。そして、おヤモを眺め、ためいきをつくやうないひかたで呟いた。

「ほんにあの子にや困つとつとですけん」

喬を見つけた留次がどんなにいつたところで、喬は歸らうとはしない。留次の方も喬がすな

ほにいふことをきく子供でないことは百も承知してゐる。喬の掌には判が押してある。幟をかついだ代償で、それを見せれば芝居小屋の木戸口が無料で通れるのだつた。

御飯時、きちんと食事に歸つたことがない。四時ごろ、「ひもじか」といつてどこからか歸つて來ると、から藷とネンガラとを懷に一杯入れて、裏口から田圃の方へかけ出して行く。何度夕食に呼びにやつても歸つて來ず、日が暮れてやつと歸つたのを見ると、顏や手足は勿論、着物も下駄も泥だらけにしてゐる。母は見せしめのために漬物小屋に入れた。タネはそつと戸の前に寄り添つて中の樣子をうかがつた。中からカンカンと醬油瓶をたたく音がする。

「おつ母さん、俺ば出さんかな。出さんば、この醬油瓶ば叩き割るばい」

タネはあわてて、小屋の戸を開けた。

喬は早熟であつたが、どこで童貞をうしなつたかは誰も知らなかつた。小學生のころ、蛇をつかまへて來て女の子をいやがらせたり、女の子を田圃の畦道にあふむけに轉がしたり、同級生の男の子と女の子との名を相合傘の繪にして、校舍に樂書したりして面白がつてゐた。或るとき、「村縞先生ト江久田先生ハ便所ン中デボボセラシタチバイ」と便所の壁に樂書したため、母タネは呼びつけられた。受持敎師は將來が思ひやられるといつた。これはもはや宗敎の力を藉りるほかはないと考へたタネは、喬をミッション・スクールにやることにした。溫厚の父清もこれに同意した。熊本市にある私立九州學院に入學した喬は校長稻富牧師の訓育を受ける

ことになつたが、どうしても洗禮を受けようとはしなかつた。喬は氣品にあふれた眉目秀麗の少年で、音樂を好み小學校時代からハモニカの名手であつた。九州學院でもハモニカを吹きつづけ、將來は音樂家になる夢を抱いてゐた。同鄕の先輩である深水吉衞が、寄宿舍に喬と同居し室長をしてゐた。深水も名門の出だが、音樂家志望だつたので、喬とよく氣が合つた。年長で芝居にも熱情をかたむけてゐた深水は藝術上の感化もあたへたやうである。しかし、その五年生の深水をまだ一年生の喬が早熟さでしばしばおどろかせた。深水はそのころ痔を病んでゐて便所を血で汚すことが毎々だつたが、或るとき、喬が深水にいつた。

「まかなひの女が來て、便所に入つたつばい」

その祕密めかしたしたりげな顏を見ても、深水は意味がわからなかつた。深水は女にメンスがあるのを知つたのは中學を卒業してからだつたが、十三歲の喬がとつくに知つてゐたのである。深水はどぎまぎと赤面し、

「そげやんこたなか。大方、鼠でも死んだつぢやろ」

と、苦しいいひわけをした。

昭和四年、喬は東京靑山學院中學部へ轉校することになつて上京した。一體、喬は生れるとすぐ、養子にやられる約束ができてゐた。母タネの姉ミツは官吏成田要藏に嫁したが、子がなかつたので、淵上家の二男喬を貰ふことにして入籍した。淵上家には、ヨミ、潮、喬、千壽、

庚、五人きやうだいが生れた。淵上家は長兄の潮が繼いだ。このため喬は小學校に上る前、養父母に伴はれて旅順に渡つたことがある。養父成田要藏は市役所に勤め、伯母に當る養母ミツは旅順大學病院の看護婦長をしてゐた。しかし成田が病死したので、喬は一應故鄕へ歸され、實父母のもとから小學校に通つてゐたわけである。そして、九州學院二年のとき、そのころは東京にゐた養母成田ミツが養嗣子を呼びよせたのであつた。自分が全然知らぬ間にでつちあげられてゐた運命、氣心ついたときに知つた養子といふ奇怪な立場が、少年喬の心を打ちのめした度合は深かつた。しかし、實父母の懇請を入れて、十五歲の喬は單身上京したのであつた。音樂家を夢みる喬が花の都東京へ强いあこがれを抱いてゐたことはいふまでもない。

成田ミツは細川家の女中頭であつた。細川侯は熊本の殿樣で、邸宅は赤坂新坂町にあり、豪奢な生活をしてゐた。ミツは手藝に長じ、人形を作つたり、生花が上手だつたりするよい趣味は持つてゐたけれども、嚴格なしつかり者のうへに、名門の誇りと見榮とを大切にする女であつたので、たちまち喬と衝突した。廣大な細川家の屋敷の一角に女中寮があり、その片隅にこれを統率するミツの部屋があつた。その六疊ほどの一室で成田親子は暮しながら、ミツは邸內を切りまはし、喬は細川家の子供たちと仲よしになつた。しかし、その遊びかたは「新屋の腕白坊ちやん」と華族の令息令孃とではすこしちがつてゐた。格式を無視する喬は差別など考へぬばかりか、反抗心からわざと子供たちと荒つぽい遊びかたをした。上野動物園や多摩川遊園

地などに行くとき、いつも自家用車に乘つて出入りする子供たちを、電車に乘せた。馴れぬ令孃は電車が怖くて、降りるまで喬にしがみついてゐた。大きな池と、たくさんの石燈籠と、ひどく凝つた築山のあるひろい庭でよく遊んだが、令息を木馬の踏み臺にしたり、令孃を股くぐりさせたりした。まるで壞れ物をあつかふやうに大事にされてゐた子供たちは、かういふのびのびした喬との遊びをよろこんでゐたが、その自由もたちまち取りあげられた。

養母は唇をふるはせて叱りつけた。

「そげやんこといふたッちや、殿さんの若さんも、お姫さんも、俺に一番なついとらすて」

喬はふくれ面でそんな抗議をしたが、ミツから今後一切、主家のお子たちと遊ぶことならぬと嚴命された。そのうへ東京に來たら東京の言葉を使はねばならぬ、下品な田舍辯は早く忘れてしまひなさいと、故郷の言葉まで禁じられた。

青山學院でも喬は持てあまし者の生徒であつた。成績が惡く落第しさうになつても勉强しようとはしなかつた。周圍の者の采配で、ずつとプロテスタントの學校に入つたが、神を懐疑する喬の耳には、奇蹟を說くキリスト敎はただ白々しいばかりであつた。イエス・キリストといふ一個の人格には强く心を惹かれたけれども、クリスチャンになる氣はなかつた。音樂家を夢みてゐる喬にとつては日々の通學は苦痛以外のなにものでもなかつた。ハモニカはやめチェロをやりたいと考へるやうになつてゐたけれども、母は樂器を買つてくれなかつた。母は口癖に、

「お前のやうな子供があるので、なにかとお屋敷に肩身が狹い。もし落第でもしたらお母さんは申しわけなくて、お屋敷に居られなくなりますよ」といひ、勉强することを强制した。英語や數學が特にできなかつたので、ミツは人を介して家庭教師を賴んだ。自宅に來て貰ふことは出來ないので、早稻田中學の代數教師小野八重三郎の家に通はせた。小野は數學とともに英語もできる人だつたので、ミツは好教師を得たと考へた。ところがこの家庭教師はミツの意に反して、學科の教育を熱心にやらうとしなかつた。

「ほんとに可愛くて勉强させたいといふのならともかく、なんでもかでも見榮なんだ。お屋敷に對して肩身が狹いなんて、自分のことばかり考へてて、坊やの氣持はそつちのけだ。坊やは音樂家になりたいといつてるのに、嫌ひな數學や英語を詰めこんだつて仕方がないよ」

教師がこんな具合だから、代數なんかやつてゐても、喬が、

「先生、つまらんから、もう止めませうや」

といふと、うん止めようと部屋に教科書を伏せてしまひ、音樂の話などに浚頭する。

小野夫人シゲも喬に同情するやうになつてゐて、夫妻は坊や坊やといつて自分の子のやうに愛した。シゲは夫のゐないときでも喬が遊びに來るとこころよく迎へ入れ、喬のどんな突飛な話でもあたたかい氣持で聞いてやつた。中學教師であるから富裕ではないが、夫婦とも溫厚で親切だつたので、喬は毎晩のやうに小野家を訪れた。それは養母の機嫌を損じた。ミツは親た



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.